

優秀賞

「SDGs—より良い未来の目標」

—世界中の人々を笑顔に—

福岡県立明善高等学校 三年

薄 まなみ

高校二年生のとき、私は自分の将来について考え直す大きな転機となる二つの出来事があった。

一つは、ハンガリー人の友人ができたことだ。私より一年上の女の子で、留学で日本にやって来た。出会ったのは弓道の大会。弓道をしているホストファミリーに誘われて始めたそう。連絡先を交換して、今でも連絡をとっている。彼女とのコミュニケーションツールは日本語だ。ハンガリーでほとんど独学で日本語を学んだそう。日本語や母語のハンガリー語の他にも何カ国語か話せて、今は韓国語を勉強中だと言っていた。私は彼女のとてもアクティブなところを尊敬している。間違いや失敗を恐れず、何事にも積極的だ。私が以前、間違うことは怖くないのか、と質問したとき彼女はこう答えてくれた。

「気にしない！間違うのは当然。大丈夫。」

そんな彼女と日本の学校の授業について話したことがある。彼女は不満そうに日本の授業は板書をノートに写すだけで隣の人と話もしない、静かすぎる、とこぼしていた。ハンガリーの学校の授業は、とにかく話して、意見を交換したり、自分の考えを発信したりするのだそう。海外の高校生はそんなにも活発に意見を出す場があり、それができるのかと少し焦りを覚えた。

二つ目の出来事は、ベトナム・カンボジアへの修学旅行だ。特に私の中で衝撃が大きかったのはカンボジアだ。私たちはカンボジアで小学校を訪問した。たくさんの子供たちが中庭で遊んでいるのを見て日本と変わらない風景だと思った。しかし教室に入って驚いた。電灯はなく、中庭と教室の間に窓ガラスや扉がなかった。そして何より驚いたのは子供たちが半日しか学校で過ごせないことだ。子供の数に対して学校が少ないので、生徒を半分に分けて、午前と午後それぞれ登校させるのだそう。学校にいない時間は家の仕事を手伝ったり、観光地でお土産を売ったりする。私たちより小さな子供たちが学校で過ごす時間以上に、日々の生活のために働いていることを知って、自分を情けなく思った。アンコールワ

ットの入口付近でお土産を売っている子供たちを見た。観光バスの周りに集まり観光客に品物を見せていた。ほとんどの観光客が子供たちのことを迷惑そうに見て通り過ぎていく。

私たちも学校の先生から、お土産を売っている子供たちから買ってはいけないと指導された。一人の子供から買ってしまふと他の子供たちも集まってきた、きりがないのだ。だから私たちも他の観光客と同じように子供たちの前を黙って通り過ぎた。その度に胸が痛んだ。私は小学校にいて友達と遊んだり、勉強したりしているときの子供たちのキラキラした瞳や笑顔と観光地でお土産を売り、たくさんの人に無視されていた子供たちのつらそうな顔を一生忘れることはないだろう。自分の無力さと幼さを身を持って知った修学旅行だった。

では、カンボジアの子供たちに必要なことは何なのか？日本をはじめ先進国とよばれる国々で行われているインターナショナルな教育だろうか。もちろんそれらも必要だろうが、「今」のカンボジアの子供たちに必要なのは、「今」を生きる術を学べる教育やその教育を受けられる場所だと思う。学校に勉強も満足にできて、生活の助けになるカリキュラムがあれば、子供たちはもう観光客に無視されて嫌な思いをすることもないはずだ。例えば小学校の理科の授業の中で野菜を育て、自

分たちで八百屋のようなものをつくり、自分たちで経営する。図画工作の授業で観光客向けのグッズをつくり、これも自分たちで店をつくったり、観光客向けのお店に置いてもらったりして売る。授業として農業や経営などを一度に学べて、生活の足しにもなるといふ一石二鳥の教育。これは私が考えた短絡的な方法だが、世界にはもつと良い方法を思いつく人がいる。彼らと積極的に考えを出し合えばもつといふ案が生まれるかもしれない。

ハンガリー人の友人からハンガリーの学校の授業について聞いたとき、今の現状に焦りを覚えた。カンボジアの子供たちを見て、今の自分の無力さを情けなく思った。この二つの出来事は私の中で大きな転機となった。偶然出会ったハンガリー人の友人のように何事にもアクティブに挑戦しようと思う。間違ふことが恥ずかしいなんて小さなことで悩まない。そして私が成し遂げるものでカンボジアの子供たちが笑顔になり、そして世界中の人々が笑顔になること。これが私の未来の目標だ。